様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３０１２６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１０６３

研究課題名（和文）看護基礎教育と継続教育の連携による中堅看護師研修プログラムの構築

研究課題名（英文）Constructing a training program for mid-career nurses by linking basic nursing education and continuing education

研究代表者
藤井　瑞恵（Fujii, Mizue）

札幌保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：２０３３１１９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　看護コンソーシアムとして札幌と北海道東部の医療施設と大学で実施してきた中堅看護師研修を洗練させ,組織横断的に大学のリソースを活用し,有機的に連携しながら,共に看護職を育て合う継続教育プログラムの構築をめざした．中堅看護師研修をリカレント教育の一環と捉え文献調査を踏ま中堅看護師にリカレント研修へのニーズ調査を実施した．
　主体的・自律的な態度で,参加者同士の討論から刺激を受け,考察を深める学習方法を志向しテーマとして倫理を望んでいた．モデル研修を「実践の問い直しから臨床倫理を考える」とし,オンラインで講義,事例検討,アクションプランの策定と,3か月後の実践報告で構成される研修を実施した．

研究成果の学術的意義や社会的意義
中堅看護師の研修テーマとして臨床倫理は，病床数や病院で標榜する診療科，病院の特徴などを問わずどのような医療現場でも遭遇する課題であった．研修ゴールを倫理的感受性を高めることとし，実践でのアクションプランを自ら設定し，評価する研修方法は，実践と結びつき，中堅看護師の学びの特性を生かしたものであり，有用であった．
　今後の課題はコロナ禍の影響もあり，ネットワークの看護教育担当者や施設管理者との意見交換の時間が十分にとれなかったことである．今後とも教育機関と医療施設が協働して，地域の次世代を担う中堅看護師の育成の役割を共有し，さらにプログラムを発展させることが望まれる．

研究成果の概要（英文）：The “Nursing Consortium,” which is a collaborative community between nursing education institutions and medical facilities, has been utilized in Hokkaido. The goal is to refine the content of mid-level nurse training programs and collaboratively build a continuing education program that utilizes university resources through the Nursing Consortium.
Mid-level nurses in medical facilities were surveyed regarding their preferences for recurrent training. The results indicated a preference for learning methods that go beyond one-sided knowledge acquisition through lectures, emphasizing active and autonomous attitudes, stimulating discussions among participants, and deeper exploration of topics such as “ethics,” which are rarely covered in other learning opportunities. As part of a model training program titled “Reexamining Practice and Considering Clinical Ethics,” an online course, case studies, action plan development.

研究分野：基礎看護学

キーワード：継続教育　中堅看護師　リカレント教育　ネットワーク　コンソーシアム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

少子高齢化等に伴う保健医療マンパワーの需要増加、地域のニーズに対応した医療職の人材育成が求められている．本研究では看護基礎教育機関と医療施設の共同体である‘看護コンソーシアム’を活用し、これまで実施してきた看護職の継続教育を評価、統合し新たな汎用性のあるプログラムを構築する．過去４年間に、北海道の医療施設が密集する札幌圏と大学、少子高齢化や過疎化が進み近郊に大学等の教育施設が少ない北海道東部と大学においてそれぞれ、実践家と共に中堅看護師研修を実施してきた．その内容を洗練させ、次世代の医療や教育に適用し、将来的にはリカレント教育に対応できる中堅看護師研修プログラム構築を目指す取り組みである．

２．研究の目的

中堅看護師研修の特徴や課題を見直し，モデルケースとしての中堅看護師研修プログラムを企画・実施・洗練させる．

３．研究の方法

インストラクショナルデザインの ADDIE モデル（Ａ：分析，Ｄ：設計，Ｄ：開発，Ｉ：実施，Ｅ：評価）を参考に研修を企画し実施した．

令和２年度　研究組織を立ち上げ，文献検討を行いながら，３年間の研究計画，役割分担を確認した．

令和３年度

分　析：リカレント研修ニーズ調査（調査１）

中堅看護師研修に関して，札幌市近郊の様々な特徴を持つ医療施設の枠を超えた中堅看護師が語ることによって，中堅看護師が長く働き続けるために必要な研修ニーズを把握する．

設　計：ニーズ調査の結果や，既存の研修の強みを生かした新たな研修をモデルケースとして設計する．研修終了後の期待される目標を設計し，研修の内容や対象者，評価方法，事前課題，実施方法，外部講師の有無などの計画を立てる．

計画立案に際しては施設集合型研修の特徴である自由な情報交換の時間を取り，中堅看護師の特性を踏まえ成人学習の特徴である実践経験を教材とし議論を取り入れる．また研修の中にフィードバック期間を入れた企画とする．

開　発：教育内容を設計した内容を基に，研修を実施するための具体的な準備を進める．新型コロナウィルス感染状況により研修参加条件に制約があるため，確実な方法としてオンライン研修とする．講師，ファシリテーターの調整，オンライン研修の機材準備や担当者の配置，環境整備も考慮する．

実施１：設計した研修を実施する．研修を実施する際は，研究メンバーで，企画．全体の良かった点や改善点などを吟味する．また参加者評価として研修終了直後に満足度と目標到達度調査を行い，内容を微修正する．

令和４年度

実施２：研修内容に評価の改善点を反映し微修正を行い，２度目の実施を行う．

令和５年度

評　価： 研修内容に関する評価として，参加者による目標到達度調査を行う．

実務への結果が反映されているかの評価．参加者による半年～１年後の行動変容調査として個別インタビュー調査を実施する（調査２）．

研修成果報告会を開催し，参加した看護管理者からの意見交換を行い総合的に評価する．

４．研究成果

調査１．中堅看護師が望むリカレント研修のニーズ調査

Ａ市内の医療施設に勤務する中堅看護師が，過去３年以内に受けた院外研修体験をベースに，リカレント研修に関して何を望んでいるのかを明らかにした．質的研究デザイン．データ収集期間：2021 年６月～９月．対象者 13 名．平均勤務経験年数は 11.9 年（5-27）であった．FGI を実施した．１）中堅看護師がリカレント研修に望むものとして、企画で３カテゴリ、研修方法で６カテゴリ、研修成果で３カテゴリ、その他２カテゴリを抽出した．２）リカレント研修の促進・阻害要因では、促進要因として成長への動機付け、人的・社会的環境、研修の魅力として 15 のサブカテゴリ、阻害要因として 3 サブカテゴリに集約され分析中である．

中堅看護師は自身のキャリア発達途上で迷いのある時期であるが，少なくとも仕事を続けていることは組織や仕事にコミットメントを持ち合わせている．キャリアの生涯発達には，自覚の程度に差があるが，自施設を離れたり，看護職以外の職種と触れ合い，多様な価値観から刺激を受け，自由に客観的に省察，自己成長の糧とする機会を求めていると考えられる．

研修企画として得られたカテゴリーの中から，研修テーマとして得られたのは，興味あるテーマとして具体的には「認知症」が，逆に学ぶ機会が少ないテーマとして「倫理」が挙げられた．看護師にとって継続教育における倫理研修の必要性は古くから言及されているが，また倫理は近年病院機能評価の中でも倫理的課題への取り組みが評価対象となり，より重要性が増している．しかし特定の病棟や専門職に関する倫理研修の報告は見られるものの，中堅看護師を対象とした倫理研修の報告はあまり見当たらない．そのため学ぶ機会が少ないテーマとして倫理を研修テーマとして取り上げる意義があると考える．

また研修方法では，座学による受動的な知識の習得ではなく，主体的・自律的な態度で，研修参加者とのディスカッションの中から刺激を受け，考察を深める学習方法を志向していた．

研修の設計・開発・実施

設計：ニーズ調査の結果を踏まえて研修テーマを「倫理」とした．倫理は病院組織の中でも看護職特有の葛藤を抱える問題で，日常的に存在している．倫理の対象となる事象は治療法から医師を含む他職種・家族までの人が対象となり幅広い．近年病院機能評価としても注目され，専門看護師活動としても倫理的視点があり，施設によっては倫理コンサルテーションの設置もある．しかしこれらのコンサルテーションや相談を受けられる機会は限られている．そのためニーズ調査でも「なかなか触れる機会がない課題」と表現された．

看護コンソーシアムに参加する医療施設は，北海道内ではあるが，都市部や人口減少地域など様々で，設置主体（公立・法人），病床数，附属教育機関の有無，病院の特性（総合病院，専門病院）は多様性があるのが特徴である．そのため企画する中堅看護師研修も専門領域に特化した内容ではなく，さまざまな所属施設の‘中堅’と言われる看護師が参集して一つのテーマに取り組み，各の立ち位置・思考枠組みに気付き，そこから今後自身の行動の契機となる発見をすることを重視してきた．この特性を今研修でも踏襲する．

中堅看護師は基礎教育や所属施設でも必要に応じて臨床倫理に関する教育を受けていると想定されるが，年齢や施設により内容に差がある．そこでどの部署でも対応可能な「実践の問い直しから臨床倫理を考える」をテーマとし，導入として倫理分析のための理論を紹介し，事例検討を行い，倫理的感受性を高め，臨床倫理の課題解決に向けた行動変容を目指す．

開発：・ 中堅看護師の豊富な臨床経験と，学習への主体性，グループディスカッションを用いた学びの特性を踏まえた研修方法とする．

・ 遠隔研修，グループディスカッションの特性から人数は限定し，１グループ辺り４名とし最大でも５名以内とする．

・ 事例検討のファシリテーターには，看護系大学教員が１Ｇにつき１－２名参加し，プログラムの進行を必要に応じて支援する．

・ 倫理：臨床倫理の課題は多いが，所属・研修可能な日程・ファシリテーターの数などを考慮し，日常倫理から意思決定支援までをテーマとし，看護実践のなかで生じる倫理的葛藤について，課題解決のための行動変化を促すことを目的とする．

・ 看護実践の事前課題，研修でのワーク，ワーク直後の課題設定とその結果の共有までを研修プロセスとする．

・ 評価は，各回の満足度，ARCS（動機付け）モデルを参考にした評価，最終回の目標到達度をリッカートで測定する．また研修終了後６ヶ月後の行動変化を面接調査で行う．

研修目標

１．臨床倫理に関する基本的な知識を再確認する．
２．倫理的課題の意思決定に向けての分析方法および意思決定プロセスを理解する．
３．倫理的課題の分析を通じて，自己の価値の枠組みを見直す．
４．変化する医療環境や多様な価値観に対応する倫理的視野を拡げる．
５．対象をひとりの人として尊重し，対象に寄り添う看護実践の方向性を見出す．
６．他施設看護師との意見交換を通じて主体的に倫理的課題に向き合う機会とする．

実施状況

2021 年度参加者　10 名　施設数 7　経験年数４年～19 年
2022 年度参加者　14 名　施設数 8　経験年数５年～27 年

研修目標到達度評価（２年分）

目標１：到達度評価は高かった．午前の基本講義に「倫理の原則を再認識できた」「基本的な部分についてわかった」，午後の理論と事例を用いた講義に「わかりやすかった」「現場で良く出会う事例だった」との意見があり，基礎知識の再考につながった．

目標２：全員が３点の普通やそれ以上に肯定的な評価であった．アクションプラン後は「分析方法やモデルを実際に活用できるようになった」「ジャンセンを用いて病棟で検討できた」と，倫理的課題の意思決定に向けた分析やプロセスに理論が役に立ち実践で用いられていた．

目標３：全員が４以上の評価であった．「自己の価値を再認識することができた」，「研修を通して患者の視点で考えることができた」，「自分の看護観が倫理という言葉で結びついた」などのコメントが寄せられ，目標後半の「自己の枠組みを見直す」ことができていた．

目標４：全員が４以上の高い評価をしていた．グループワークでは，多職種（医師，理学療法士，介護士），家族などとのコミュニケーション不足，家族の意思確認の必要性を再発見したなどの感想があった．アクションプランでは，他職種カンファレンスの開催，入院時に家族の意思決定確認を共有するなど，研修を通して医療環境や価値観の多様性への視野が広がった．

目標５：半数以上が‘とてもそう思う’の５点であり，高い到達度であった．「倫理を通して，日ごろの看護を共有することができたことが大きな成果，臨床の気づきにつながった」「傾聴の

大切さの気づき」などが記載され，対象の尊重と看護実践の方向性の確認に研修が役立った．
目標６：ほぼ全員が最高に評価しており，オンラインでの意見交換ではあったが，研修による他施設看護師との意見交換により，主体性と倫理的課題に向き合う姿勢が促進された．　ファシリテーターを通して「参加者は話しやすいオンラインセッションだった」とのコメントがあり，居心地の良い研修だった．参加者は最初「倫理課題を取り扱うことは難しい」と感じていたが，アクションプランを病棟に持ち帰り，倫理カンファレンスを開催するなどの実践を行い，報告を共有した．

調査２．中堅看護師を対象とした倫理研修後６ヶ月後の研修者が捉える成果

本研究は 2022 年度に実施したリカレント倫理研修参加者において，終了半年後の時点における行動レベルの変化を知ることである．行動への変化は，カークパトリックの研修評価を参考に実施した．カークパトリックの四段階評価中、「反応」レベルの評価は，研修３回の受講後アンケートに相当し，高評価を得ている．「学習」レベルの評価は，知識やスキルを評価するが，第３回の研修内容であるアクションプランの策定と実施報告が一部であるが相当すると考える．「行動」レベルの評価は，現場実践度を本人や周囲から評価するとされるが，今回は研修終了後半年後に参加者の看護実践で，行動レベルでどのような変化が表れているかを知ることを目的とした．インタビュー実施時期：2023 年６月～７月　経験年数（10～28 年）

2021 年度倫理研修全３回を修了した参加者 13 名（９施設）に依頼し，７名（６施設）がインタビューに参加した．‘研修成果を活用して行動が変化している’と回答した人が４名，‘研修成果を活用していない’と回答した人が３名であった．分析は１）参加者７名全員が着眼した研修終了後６か月後の変化．２）行動変化を自覚した人４名で、行動変化の内容を分析中である．

倫理研修成果報会

今回２年間の参加者，施設管理者，本企画に関心のある人を対象に報告会を開催した．研修成果と，施設管理者から見た継続教育における倫理研修のあり方，発展性への示唆を得ることを目的とした．2023 年 11 月 11 日（90 分）．札幌市立大学看護学部中講義室を会場に Zoom を用いたハイブリッド方式で実施した．参加人数　25 名．基調講演と、参加者アンケート、医療施設管理者および参加者の報告と意見交換を行った．

報告会の評価として、「倫理的課題を抱えるスタッフの思いやジレンマをそのままにせず解決する環境を整え話し合うことや一緒に考える，チームで共有することが大切である．」「その先にやりがいや達成感もあるのだろうと思う．倫理に関することだけではないが，やはり語り合う事が重要だと再認識した」「生涯教育の重要性，学び直しの大切さ．現場のスタッフが足を止めて改めて学ぶ場を作ることの意義を感じた」とのコメントが寄せられた．

総括

本研究でテーマとした臨床倫理は，病床数や病院で標榜する診療科，病院の特徴などを問わずどのような医療現場でも遭遇する課題であった．研修ゴールを倫理的感受性を高めることとし，実践でのアクションプランを自ら設定し，評価する研修方法は，実践と結びつき，中堅看護師の学びの特性を生かしたものであり，有用であったことも確認できた．

本研究での課題としては新型コロナウィルス感染症の影響もあり，ネットワークの看護教育担当者や施設管理者との意見交換の時間が十分にとれなかったことである．今後とも教育機関と医療施設が協働して，地域の次世代を担う中堅看護師の育成の役割を共有し，さらにプログラムを発展させることが望まれる．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 藤井瑞恵、武富喜久子、栗原知己他
２．発表標題 中堅看護師が望むリカレント研修
３．学会等名 第26回日本看護管理学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	古都　昌子 (Furuich Masako) (00602583)	鳥取看護大学・看護学部・教授 (35102)	
研究分担者	山本　勝則 (Yamammoto Katsunori) (10240087)	天使大学・看護栄養学部・教授 (30122)	
研究分担者	中村　恵子 (Nakamura Keiko) (70255412)	札幌市立大学・看護学部・専門研究員 (20105)	
研究分担者	樋之津　淳子 (Hinotsu Atsuko) (90230656)	札幌市立大学・看護学部・教授 (20105)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	武冨　貴久子 (Taketomi Kikuko) (80543412)	札幌市立大学・看護学部・講師 (20105)	
研究分担者	森川　由紀 (Morikawa Yuki) (80438423)	札幌市立大学・看護学部・講師 (20105)	
研究分担者	田仲　里江 (Tanaka Rie) (40613683)	札幌市立大学・看護学部・助教 (20105)	
研究分担者	村松　真澄 (Mnramatsu Masumi) (50452991)	札幌市立大学・看護学部・准教授 (20105)	
研究分担者	栗原　知己 (Kuribara Tomoki) (00910035)	札幌市立大学・看護学部・助教 (20105)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関